

	I	II
東 京	1.314	-0.615
旭 川	0.308	-0.184
鶴 岡	0.189	-0.136
櫛 引	0.308	-0.184
伊 那	0.310	0.172
宮 崎	0.312	0.131
Freiburg	-0.465	0.079
Neuenbuerg	-0.465	0.079
Goettingen	-0.089	-0.219
Hannover	-0.669	0.069
Wien	-0.425	0.093
Linz	-0.539	-0.426
Salzburg	-0.419	0.097
Nancy	0.328	1.043

継続調査データの解析

柏 木 宣 久

日本では多くの世論調査が行なわれている。それ等の目的・方法は様々である。世論調査の分類というのは余り興味ある問題ではないが、データ解析の立場からみて、次の分類は重要である。

一回限りの調査, 継続調査

世論調査の結果の解析には、その対象が人間の意識であるが為に、必ず曖昧さが付きまとう。いきおい、その解釈は主観的とならざるをえず、許容すべきでない曖昧さまでをも解釈してしまいかねない。あるいは、解釈により客観性を持たせる為に、調査結果を被験者の属性であるとか何等かの計測できる現象と結び付ける方法がある。そうした方法はデータから情報を抽出する為の重要な手段である。しかしながら、そうした方法によってすら許容すべきでない曖昧さまでをも解釈してしまいかねない。許容すべきでない曖昧さとは、調査に付随する誤差である。

調査に付随する誤差を二種類に分ける。一つは標本誤差であり、もう一つは非標本誤差である。但し、ここでいう非標本誤差とは、いわゆる調査誤差ばかりではない。調査対象が人間の意識である事に由来する曖昧さをも含めてしまう。社会環境や調査環境がちょっとでも変化すれば人間の意識などたちどころに変化する、という先入観が意識調査を曖昧と思わせている。人間の意識の変化に確率構造を与え、それをモデルに取り込んでしまえば、曖昧さが定式化される。

標本誤差を推定する為の計算法は、標本調査論の教科書に必ず記述されている。但し、そうした計算法による誤差評価が常に行なわれているわけではない。その原因を述べるのが目的ではないので多くは述べないが、標本抽出法に見合った誤差評価をするに足るデータを得るのが困難であるのは事実である。

一方、非標本誤差に関しては、その為に設計された特別の調査でも実施しない限り、その評価は不可能であると信じられてきた。それは、世論調査の多くが一回限りの調査としてしかみられてこなかったからで、誤差を評価する為に必要な繰り返しを見出し得なかったからである。

こうした事情は、継続調査に於て一変する。一定した方法による調査の繰り返しは、我々に多くの情報を与えてくれる。調査時点の違いを、環境は滑らかに変化するという事前情報によって克服する事により、標本誤差のみならず、非標本誤差の評価が可能となる。